

## 1 音楽科における子どもに備えさせたい資質・能力

音は自然界に存在し、日常生活や社会生活の中にも、必ず音や音楽が存在する。生活に音楽を生かし、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育てていくことは、心豊かな生活を送り、そしてよりよい社会を創ることにつながる。

子どもたちは、表現及び鑑賞の幅広い活動の中で、音や音楽に対して興味・関心を高め、音楽的な見方やとらえ方、考え方を働かせて音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばしていく。そして、さらに音や音楽の働きや音楽文化について深く理解していくことで、豊かな情操を育んでいく。

このような営みにおいて、音楽を形づくっている要素を聴き取る力と音楽を形づくっている要素が生み出す面白さや特質、雰囲気などを感じ取る力が音楽科学習のベースとなる。いわゆる知覚・感受であり、インプット力としての気付く力や感じ取る力を育むことが大切である。気付きや感じ取りを出発点として、多様な音楽の特徴をとらえ、音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさなどを味わって聴くことができるようになるであろう。

一方、アウトプット力として、気付いたことや感じ取ったことを言葉にして伝えるコミュニケーション力を育むことが大切である。気付いたことや感じ取ったこと、あるいは思いや意図を相手に伝えるコミュニケーション力は、音楽を表現する力にもつながっていくと考える。

また、音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりや創作の技能を身に付けることが大切である。よりよい音楽表現へと高まっていくためには、技能の向上は欠かせない。表現できたときの喜びの積み重ねが、音楽を楽しみ、音楽を追求する気持ちをスパイラル的に向上させていくとも考える。

そこで、本学校園音楽科における子どもに備えさせたい資質・能力を次のように考える。

- 気付く力や感じ取る力
- 気付いたことや感じ取ったことを伝えるコミュニケーション力
- 音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりや創作の技能

これらに重きを置きながら、よりよい音楽表現を追求できるような授業を構想し展開していく。

## 2 資質・能力を育むために

### (1) ねらいに即した音楽を形づくっている要素に焦点をあてた授業展開の工夫

子どもたちに「何に気付かせたいのか」「何を感じ取らせたいのか」というねらいを明確にしながら授業を構想することが大切である。そして、そのねらいに即した、気付かせたい、感じ取らせたい音楽を形づくっている要素を絞り、その要素に焦点をあてた授業を構想し展開する。

展開にあたっては、焦点化した音楽を形づくっている要素の提示の仕方とタイミングを工夫する。教師からの一方的な提示ではなく、できるだけ子どもたちの気付きから導き出せるよう工夫したい。

## (2) 子ども同士の気付きや感じ取りを深めていく場の設定や教師のはたらきかけの工夫

### ① 言葉を受け止める

音を言葉で表現するときに、なかなか言葉にならないことがある。例えば、「ぼわっとした音」や「黄色い音」など、とらえた音のイメージを自分のもっている語彙に照らし合わせて表現する。このような抽象的な言葉を使って表現することを認める教師の姿勢を常日頃から子どもたちに示しておくことが大切であると考え。語彙は発達段階に応じて増えていくが、音や音楽を言葉で表現することへの抵抗感を低くしておくことが、子どもたちの音楽的な語彙を増やしたり、子どもたちが感じたことを素直に表現したりすることにつながると考える。

### ② 気付きや感じ取りを共有する

一人一人の気付きや感じ取りを子ども同士が共有することで、自分にはなかった気付きや感じ取りに出会うことになる。その出会いが次の気付きや感じ取りを生むことになるであろう。そのために、個人が気付いたことや感じ取ったことをペアやグループで意見交換したり、全体に対して発表したりする場面を積極的に設定する。さらに、教師が子どもたちのつぶやきなどを拾い、それを全体に広めることが大切と考える。

また、ペアやグループなどでお互いの意見を交換することによって、コミュニケーション力が引き上げられることを期待する。

### ③ 気付きや感じ取りを深めるための問い返しや問いかけ

一人の子どもの言葉に対して「どういうところからそう感じたのかな？」などと、問い返していくことが大切である。また、歌唱表現をする際に「どうしてそのように歌いたいのか？」という根拠や理由、思いや意図を明確にさせる問いかけをしていきたい。このことにより、音や音楽への思考が深まり、より気付きや感じ取りを深めていくことにつながると考える。

## (3) 基礎的な音楽表現技能を高めるための常時活動の設定

音楽表現をするための技能の習得には、繰り返しの練習が必要である。例えば、歌唱や合唱において、豊かな響きのあるしっかりした歌声で歌えるためには、基礎的な発声練習の積み重ねが必要である。

常時活動には、次のようなものが考えられる。歌う前の体ほぐしや発声練習、鍵盤ハーモニカやリコーダーの運指練習、リズム遊びやリズムゲーム、既習曲の歌唱や演奏、簡単な楽曲の階名唱、音符や休符の聴き取りや書き取りなどである。これらの取組は、発達段階を考慮しつつ、さらに音楽を形づくっている要素を意識しながら行っていく。

小・中学校ともに少ない年間時数の中ではあるが、幼稚園を含めた11年間の長いスパンで考えたとき、短時間でも継続して行うことで、技能の定着と向上を図ることができる。と考える。

(文責 小村 聡)